

# I 序 論

# 「白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究」の目的と構成

弘前大学 掛 谷 誠

## 1. 研究の目的

この論集は、「白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究」というテーマのもとで文部省科学研究費の補助を得て、1987年度から1989年度の3年間にわたって実施した調査・研究の成果の報告である。

テーマには直接的には明示されていないが、この研究はいわゆる「春秋林道問題」に端を発している。それは、世界最大規模の原生のブナ林を擁する白神山地を横断する春秋林道の計画をめぐって、林道工事を推進する側と自然保護を訴える側とが激しく対立し、全国的な関心が寄せられた問題である。多くの環境問題と同様に、「春秋林道問題」は自然・経済・政治・社会的な要因や価値観の相違などが複雑に絡み合っているのであるが、私たちは、白神山地周辺の地域社会に生きる人々の生活・社会・文化と環境諸条件との相互関係を共時的・通時的に明らかにするという立場から、この問題にアプローチしたいと考えたのである。

「春秋林道問題」は、表層的にみればローカルな環境問題であるが、それが「開発と自然保護」「農山漁村と都市」「地方(周辺)と中央」など深刻な相剋を内包した文明史的課題に深く根差していることは明瞭であろう。あるいは、地球的規模の環境問題を視野にいれば、世界レベルでの根源的課題に通底した問題であるといってもよい。私たちはこのような視座を共有しつつ、白神山地ブナ帯域の自然と地域の生活に即して調査を進めるという基本方針を立てたのである。その研究の大筋は、1) 白神山地の自然環境の特性を、とくに地質・地形条件と植生との相互関係に留意した視点から正確に把握し、2) その自然のもとで展開した地域社会の生活内容を、生業構造の歴史の変遷を主軸として追求することによって、3) ブナ帯を舞台とした自然と人間との関わり合いを生態史的に解明することにある。

この研究は、自然・社会・文化の相互関係に強い関心を持つ文化人類学者(生態人類学者)がコーディネーターの役割を受けもち、津軽の地域研究を指向する人文・社会科学的研究と、原生のブナ林をめぐる開発と保護に関する環境科学的研究の統合を目指しており、問題を抱える地域社会を対象とした学際的な研究として位置づけることができる。調査の一部については、弘前大学・人文学部・人間行動コースの実験演習、筑波大学大学院・環境科学研究科の環境科学実習と連動させ、多くの学生・大学院生とともに地域の自然と人びとから学び、学際的な地域研究の可能性の模索を試

みた。

この調査は学術的な基礎研究として推進してきたのであるが、一方で、「春秋林道問題」が論じられる際に欠落しがちな視点と資料を提示することによって、いささかなりとも問題の解決に寄与したいという願いを支えとしてもいる。

## 2. 「春秋林道問題」の概要

「春秋林道」が計画されるに至る経緯やその後の展開については、すでに、詳細な新聞記事の追跡によってその過程をうきぼりにした労作や(『白神山地と地域を語る会』実行委員会編、1988)、すぐれた問題意識と緻密な調査にもとづいた論稿(井上、1987)が発表されている。ここでは、それらの資料に依拠しつつ、問題の概要を記しておきたい。

青森県と秋田県の県境域に位置する白神山地は、標高1000メートル級の急峻な山々がつらなる山塊であり、その総面積は4万5000ヘクタールにおよぶ。ブナを主体とする原生的な植生に覆われている白神山地の中心域は1万6000ヘクタールの広がりをもつ。そこは、1980年代に至るまで本格的な山林開発の対象とはならず、地元のマタギの猟場として、あるいは少数の登山者や溪流釣りを愛する人びとが入山する、「秘境」の面影を残した山域であった。この白神山地のほぼ中央部、青森・秋田の県境沿いを貫通する林道計画が1982年3月に発表された。「広域基幹林道『春秋線』」、つまり「春秋林道」の計画である。青森県西目屋村と秋田県八森町を結ぶ総延長29.6キロメートルの林道であり、総工費31億1700万円の予算が計上されている。

「春秋林道」計画の推進母体となったのは、1978年に設立された「春秋県境奥地開発林道開設促進期成同盟会」である。それは、八森町・西目屋村・鱒ヶ沢町・岩崎村の4町村長を設立発起人とし、会長・顧問に秋田県・青森県を選挙区とする国会議員を擁した組織である。この「促進期成同盟会」の結成を熱心に押し進め、そのイニシアティブをとったのは八森町の町長である。氏は、役場職員時代(1958年)に白神山地の奥地資源調査に参加し、その経験に基づいて早くから奥地開発のための林道を構想していたという。このような町政のリーダーの「先見の明」と、農林水産業の不振や深刻な過疎問題の打開策として大規模な公共事業の誘致を構想せざるを得ない、高度経済成長期以来の町村行政の指向性が結びついて、「地元の悲願」である林道計画が遅まきながら実現に向かい始めたのである。「促進期成同盟会」は、つぎに述べるような自然保護運動の動きに対応して、1983年11月の総会で峰浜村と深浦町の参加を得て、白神山地周辺域の町村の総意の結集を示す形で組織を強化した。また林道建設を望む秋田県側の地元住民は「春秋林道を促進する会」を結成し、秋田県知事や林野庁あるいは秋田県議会への建設促進の陳情など、精力的な運動を進めている。

一方、このような林道建設計画を知った地元の自然保護団体はきわめて敏感に反応し、「秋田自然を守る友の会」と「秋田県野鳥の会」が1982年5月に秋田県に対して、「青森県自然保護の会」と「日

本野鳥の会弘前支部」が1982年7月に青森県に対して林道建設反対の要望書を提出している。翌年の1月には秋田県の実自然保護団体は「白神山地のブナ原生林を守る会」を結成し、4月には青森県の実自然保護団体が「青秋林道に反対する連絡協議会」を発足させ、相互に協力して強力な反対運動を展開していった。そして、「日本自然保護協会」や「日本野鳥の会」などの中央の実自然保護団体も地元の要請に素早く対応し、現地調査を踏まえつつ積極的な反対運動をくりひろげた。新聞やテレビなどのマスメディアもこの問題を大きく取り上げて報道し、白神山地の原生的ブナ林の保全を求める運動は全国的な盛りあがりを見せるのである。このような運動の展開は、困難な状況乗り越えてゆく地元の自然保護団体の強い意志力と粘り強い行動力によって切り開かれてきたのであるが、1980年代に入って大きなうねりを形成し始めた「自然との共存」を希求する時代思潮がそれを支えてきたことも特記しておく必要がある。

開発と自然保護について二者択一的な論点に終始しがちであったそれまでの自然保護運動とは異なり、より深く広い視野から問題をとらえ、その理論的な裏付けを基礎に据えて運動を展開した点も、青秋林道をめぐる反対運動の際立った特徴である。その契機となったのは、1985年6月に地元の秋田市で開催された「ブナ・シンポジウム」である。それは後に「秋田方式」と呼ばれるのだが、各地の実自然保護運動に関わる人びとや研究者・行政担当者を結集し、開発側をも巻き込んだ全国規模のシンポジウムである。そこでは、国内のブナ林の現状が報告され、開発と保全について多面的な議論が交わされ、日本の基層文化を育んだ母胎としてのブナ林の価値が再認識され、いわゆる「ブナ帯文化論」が体系的に論じられた(梅原ほか、1985)。こうして、「ブナ帯文化論」や「遺伝子貯蔵庫」論などの文化史的・文明史的な根拠や、ユネスコのMAB計画などの国際的な環境保全の動向にも根を下ろすことによって、白神山地のブナ林の保全を求める運動は新たな質を獲得してゆくのである。

地元の町村の強い要望と、広範な世論の支持を獲得しつつある自然保護側の主張とが拮抗する中で、1986年8月、林野庁は独自の調査にもとづいて「白神山地森林施業総合調査報告書」を発表した。それは、白神山地の核心域を保全林とし、その代わりに「自然観察教育林」を含む森林の多面的利用による地域振興を推進する施策を提示している。問題の県境域に、核心部のブナ林を分断するように「自然観察教育林」が設定されているなど、灰色の部分を含んだ提言ではあるが、それは国有林野行政が大きな転換期を迎えていることを示す報告書であったと評価しうるのである。

このような状況の中で、秋田工区の林道建設は県境域に達し、水源涵養保安林に指定されている青森県側のブナ林への林道延長工事が開始されることになった。しかし工事に着工するためには林道予定域の保安林が解除されなければならない。1987年5月、林道の工事主体である秋田県は保安林解除の申請手続きをとり、林野庁治山課の審査などを経て、同年10月に青森県は保安林解除を告示した。きわめて差し迫った事態にたちいたり、ブナ林の保全を求める人びとは保安林解除に対す

る多数の異議意見書を集約し、公開の聴聞会の開催を求める運動を展開した。そして、それはブナ林保全の方向への大転換という、劇的な成果に結実するのである。

この大転換の原動力となったのは、保安林解除の「直接の利害関係者」に相当する、鱒ヶ沢町の赤石川流域の住民である。赤石川と深く結びついた生態史を背景としつつ、大規模な融雪洪水によって88名の死者をだした大然災害(1945年)の痛切な記憶や、赤石ダムの建設(1956年)を強引に進めた開発主体(電力会社・行政)への不信、ダム建設やブナ林の伐採が川の水量の減少をもたらしたと直覚する生活に根差した不安感、開発効果への疑義などが、自然保護団体の懸命の働き掛けに呼応して、噴出したとみてよいであろう。その結果、1000通をこえる関係住民分を含めて、1万3000余通の異議意見書が提出されたのである。その衝撃はきわめて大きく、ついには行政当局をも動かし、青秋林道の新規工事は当面のあいだ停止されるに至る。こうして、「青秋林道問題」は大きく方向を転換するのである。

1988年12月、林野庁の諮問委員会は新たな林政の方向性を提示し、原生的な自然林の保護を推進するために「森林生態系保護地域」の設定を謳い、その候補地の一つとして白神山地を挙げたのである。青森・秋田の両営林局は、この諮問を受ける形で「森林保護地域設定委員会」を設け、保護地域の線引きを大きな争点としつつ協議を続けている。

### 3. 研究内容の構成

もちろん、私たちが「青秋林道問題」の推移に重大な関心を持ち続けてきたのであるが、この研究の主要な目的は、「青秋林道問題」の基底部にある地域住民の生活と環境との関係を生態史の観点から明らかにすることにある。それは、白神山地の自然特性を明確に把握することによって、その意味・価値を追及する試みであり、そのような自然のもとで展開してきた地域住民の暮らしをとおして、さまざまな文明史的課題について再考する試みである。以下で、この研究内容の構成について、論集の目次構成をたどる形で概説しておきたい。

#### (1) 白神山地の地質・地形・植生の特性と生態史

白神山地の地質・地形・植物相・動物相などの基本的な自然特性の調査については、すでかなりの蓄積がある(最近の報告では、たとえば青森県、1987、1989；八木・吉川、1988；牧田ほか、1989など)。この研究では、これらの成果を踏まえつつ、とくに土地環境の詳細な解析と、地質・地形と植生の相互関係に留意して調査を進めた点に大きな特徴がある。それは、白神山地の地質・地形・植生の形成史・生態史を背景として、現在の地質・地形・植生の特徴とその価値、およびそれらの変化がおよぼす影響を読み解こうとする試みである。

#### (2) 基層文化の生態史

日本の基層文化を育んだ母胎として、西南日本を中心とした照葉樹林帯と東北日本を中心とした

落葉広葉樹林帯の二つのマクロな生態系を認め、それぞれに独自の文化類型を設定する試みが定着しつつある。いわゆる「照葉樹林文化論」(上山編、1969；上山ほか、1976など)と、「ブナ帯文化論」(市川ほか編、1984など)あるいは「ナラ林文化論」(中尾、1983；佐々木、1984、1986)である。それらは、生態学・栽培植物学・文化人類学・考古学・人文地理学などの研究蓄積を背景としつつ、環境論と文化要素の広域的な分布論や民族文化史を統合した理論であるといつてよい。白神山地のブナ林保全を求める運動が、この「ブナ帯文化論」を一つの理論的根拠とすることによって、その視野を大きく広げた点についてはすでに述べた。

私たちの「基層文化の生態史的研究」は、一方で、このような日本の基層文化についての学問的潮流に根差しているといつてよいが、他方では、開発と保護をめぐる運動の基底部にある地域住民の生活文化に目を向けるという意味で、基層文化という語を捉える発想に支えられてもいる。それゆえこの研究は、つぎに述べるような二つの点で独自の的方法論的な特徴をもつ。

一つは、広域にわたる文化要素の分布論ではなく、白神山地周辺域に焦点を定め、その自然・社会・文化の相互関係をいわばドリリング・メソッドによって明らかにしようとする点である。もう一つは、その関心が現代の地域社会により強く向けられている点である。つまり、現代の状況をよりよく理解するために、いわば歴史を遡及する形で生活と環境の関係を問う視点である。それは、川喜田(1987)が提唱する「生態史的アプローチ」に通ずる視点である。日本の農山漁村の研究では、もはや自明の前提となりつつあるのだが、村むらでの生活は1955年以降のいわゆる高度経済成長期に激しい変化に見舞われ、大きく変貌している。それゆえこの視点に立てば、高度経済成長期以後の変化を、それ以前の時期の生活内容と対比することによって明確化し、その変化の意味を問うことに力点が置かれることになる。

この研究は、「ブナ帯文化論」「ナラ林文化論」の視点を共有しつつ、白神山地周辺域の町村を対象として、主としてここ100年程度の生活構造の変化を生態史的に明らかにする試みである。具体的には、以下のような枠組みにそって研究は進められた。

#### 1) マタギの自然知の世界

東北日本のブナ林の分布域は、クマやニホンカモシカの分布域と重なり、いわゆるマタギが活動する場でもあった(石川、1985)。「ブナ帯文化論」からいえば、マタギ論は不可欠の課題であろう。白神山地も、津軽マタギの存在によってよく知られた地域であり、民俗学的な研究の蓄積もある(森山、1968；千葉、1970；青森県自然保護課、1985、1987など)。しかし、ここ100年ほどの間の地域社会の生活について考えるとき、マタギはその重要な構成要素の一部ではあるが、そのみに焦点を当てすぎると生活の全体構造を見失う可能性がある。それゆえ、私たちは「マタギの村」の生活構造を探る視点を中心的な課題として取り上げることにしたのである。

この研究においては、むしろ、マタギとしての生きた経験と伝統に裏打ちされた自然知の詳細な

記載をとおして白神山地の自然のもつ意味を探る調査に重点をおいた。前述した地質・地形・植生の調査は白神山地の核心域を対象としたのであるが、そこは津軽マタギの行動圏でもある。実際、これらの調査は西目屋村在住のマタギ、工藤光治氏の協力を得て進められた。それは工藤マタギの身についた自然知に支えられた調査行であったが、同時に氏の自然観・自然認識を学ぶ機会でもあった。白神山地の自然を考える際の重要な要件であるという主張もこめて、一人の津軽マタギの自然知の世界を描き出したいと考えたのである。

## 2) 白神山地周辺域の町村の比較研究

調査の対象とした白神山地周辺域の町村は、青森県側の西目屋村・赤石地区(鱒ヶ沢町)・岩崎村、秋田県側の藤里町である(図1)。修士論文(筑波大学・環境科学研究科)の研究対象として西目屋村を選び、調査を進めていた上野の指導のもとで、調査計画の初年度(1987年度)に現地調査を実施し、その成果を土台として他の町村の調査を積み上げていく形で研究は進化した。2年度には旧赤石村と岩崎村、3年度には藤里町で集中的な調査を実施したのであるが、いずれも弘前大学・人間行動コースの教官と学生、および後に述べる「マタギの村」の研究者の共同調査である。このような調査スタイルを取ることによって、直接的な経験に裏打ちされた町村間の比較の視座を確保しつつ研究を進めた。

この調査の過程で、私たちは今更ながらこれらの町村が深刻な過疎と出稼ぎの常態化という共通

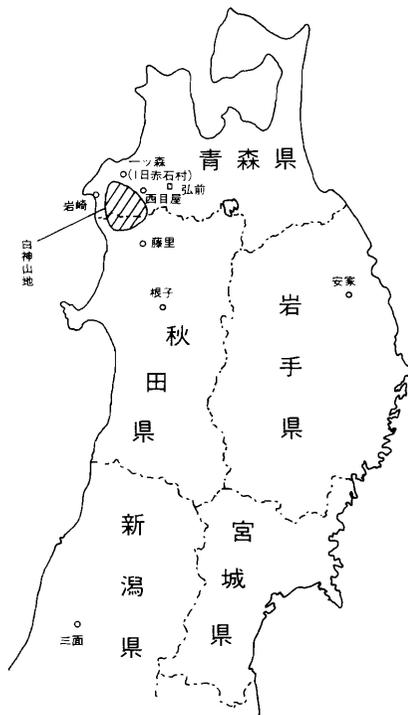


図1 調査対象地(概略図)

した悩みを抱えている実態を確認したのであるが、一方で、高度経済成長期以前にはそれぞれの町村が独特の個性を持つ地域社会であったことを見出した。そして、これらの地域社会における生活の変遷過程の根底に、周辺化を強いられてきた「ブナ帯文化」の歴史が潜んでいると考えるに至るのである。このような認識を共有しつつ、各町村での生業構造の歴史の変遷をたどる形で、執筆責任者はそれぞれの町村の個性を描き出すことに努めている。

## 3) 「マタギの村」の比較研究

西目屋村・旧赤石村はそれぞれ目屋マタギ・赤石マタギの村としてよく知られているが、前にも述べたように、この研究ではマタギそのものではなく、それを生業の一部とする「マタギの村」の全体構造を探ることを目的とした。そして、東北日

本のブナ林帯に分布する山村の象徴として「マタギの村」を捉え、他のいくつかの「マタギの村」を視野にいれ、それらとの比較研究をとおして白神山地周辺域の山村の特徴を明らかにする方針をとった。比較対象とした「マタギの村」は、岩手県・岩泉町の安家地区、新潟県・朝日村・三面、および秋田県・阿仁町・根子である(図1)。

安家地区を担当した岡と、三面を担当した池谷は、筑波大学大学院・環境科学研究科に在学中から東北山村の生態史的研究という問題意識をもって精力的に現地調査に取り組み、白神山地域の調査プロジェクトの開始時には、すでに相当の研究蓄積をもっていた。安家地区と三面は、かつては「秘境の里」として紹介されることもあった山村だが、二人の研究者は、それらの山村の生態史を貫く生活原理について、ある意味で対照的な結論を導き出しつつあった。その違いを強調していえば、安家地区では、自給性を維持し最小限の生存を確保する生活原理が卓越しているが、三面は、かなり早い時期から外部の経済と強く結び付いた資源利用によって支えられてきたのである。池谷・岡の両研究者をスタッフに迎え、旧安家村・三面の研究成果を一つの指針としてプロジェクトはスタートした。そして共同研究を進める過程で、上述した研究枠組みの有効性を確認し、さらに白神山地に近く、かつマタギの村として有名な阿仁町を調査対象に加えたのである。

これらの三つの「マタギの村」と比較することによって、白神山地周辺域の山村が、東北日本の山村に共通する特性と問題点をもちつつ、独自の生態史を展開したことをうかがい知ることができる。

### (3) ブナ林の経済学と自然保護論

この研究プロジェクトを支えた基調の問題意識は、地域の開発と自然保護・保全とが相互に補完し合う方向性を模索することにあつたといつてよい。そのための基礎作業として、地域の環境と住民の暮らしとの相互関係を深く理解することが不可欠の条件であるという認識が、これまでに述べてきた研究の根底にある主張であつた。これらの研究と連動しつつ、「ブナ林の経済学」と「春秋林道問題」をめぐる自然保護運動の評価を主軸として、開発と自然保護の問題を論じることがここでの課題である。

### (4) 生態史と文明史の交錯

最後に、これらの諸研究を踏まえた上で、生態史と文明史の交錯という観点からいくつかの問題提起を試みた。

#### 引用文献

- 青森県、1987、『白神山地自然環境調査報告書(赤石川流域)』。
- 、1989、『白神山地自然環境調査報告書(大川・暗門川流域)』。
- 青森県自然保護課、1985、『青森県のマタギ』。
- 青森県自然保護課、1987、『青森県におけるマタギ社会』。
- 千葉徳爾、1970、「津軽マタギの現状と系譜」『津軽の民俗』(和歌森太郎編)吉川弘文館。

- 市川健夫、山本正三、斎藤 功（編）1984、『日本のブナ帯文化』朝倉書店。
- 井上孝夫、1987、「地域開発と環境保全－白神山地・春秋林道建設問題報告－」『法政大学大学院紀要』20。
- 石川純一郎、1985、「マタギの世界」『ブナ帯文化論』（梅原 猛ほか著）思索社。
- 川喜田二郎、1987、『素朴と文明』講談社。
- 牧田 肇、齋藤宗勝、斎藤信夫、八木浩司、高橋 晃、1989、「青森県白神山地追良瀬川流域の地形・植物相および植物群落」、*the Science Report of the Hirosaki University* 36(1)。
- 森山泰太郎、1968、『砂子瀬物語』津軽書房。
- 中尾佐助、1983、「ナラ林文化の提唱」『日本農耕文化の源流』（佐々木高明編）日本放送出版協会。
- 佐々木高明、1984、「ナラ林文化」『月刊みんぱく』8(9)、国立民族学博物館編。
- 、1986、『縄文文化と日本人』小学館。
- 『白神山地と地域を語る会』実行委員会編、1988、『資料集 新聞記事で綴る白神山地のブナ原生林と春秋林道』西津軽郡教職員組合。
- 上山春平（編）、1969、『照葉樹林文化－日本文化の深層』中央公論社。
- 上山春平、佐々木高明、中尾佐助、1976、『続・照葉樹林文化－東アジア文化の源流』中央公論社。
- 梅原 猛ほか、1985、『ブナ帯文化』思索社。
- 八木浩二、吉川契子、1988、「西津軽沿岸の完新世海成段丘と地殻変動」『東北地理』40。

## 追 記

1990年3月に「森林保護地域設定委員会」は懸案の青森・秋田県境域を含めて、原生林のほぼ全域を保護地域とすることを決定した。これによって、春秋林道の建設中止が確定した。